

| 論文審査の結果の要旨および担当者 | |
|---|--|
| 学位申請者 | 中井 啓介 |
| 論文担当者 | 主査 富田 尚裕 |
| | 副査 新村 健 |
| | 副査 西口 修平 |
| 学位論文名 | Sex differences in associations among metabolic syndrome, obesity, related biomarkers, and colorectal adenomatous polyp risk in a Japanese population (日本人におけるメタボリック症候群、肥満、肥満関連バイオマーカーと腺腫性ポリープの関連性に関する性差研究) |
| 論文審査の結果の要旨 | |
| <p>最近増加傾向にあるメタボリック症候群(MetS)は、大腸癌や大腸腺腫性ポリープ(AP)に関する報告は少ない。また肥満は、欧米からの疫学調査で大腸癌のリスクを増加させることが示されているが、本邦では肥満とAPに関する性差研究はほとんどなされていない。そこで本研究では、日本人でのMetSと肥満、さらに肥満関連バイオマーカーと大腸癌の前癌病変とされるAPとの関連性における性差を明らかにすることを目的に多施設横断研究を行った。2014年4月から2016年12月までに、初めて大腸内視鏡検査を受けた489名を対象に、MetSさらに単純性肥満の指標となるBMI、内臓脂肪型肥満の指標となるウエスト径(WC)、ウエスト/ヒップ径(WHR)を計測し、MetSおよび肥満とAP・advance adenomaの有無、ポリープの個数、大きさ、存在部位との関係について検討した。また、肥満関連バイオマーカーとして、高分子量Adiponectin、Leptin、インスリン抵抗性の指標であるHOMA-IRを測定し、肥満との関連性を前向きに検討した。MetSは日本内科学会の提唱する診断基準を用いた。また、肥満の定義は、BMI\geq25kg/m²、WC\geq85cm(男性)、WC\geq90cm(女性)、WHR\geq0.9(男性)、WHR\geq0.85(女性)とした。その結果、1) APの有病率は男性が高値であった。2) MetSは男女ともAPのリスク因子であった。3) 多変量解析では、男性では年齢と飲酒歴で補正するとWC高値が、女性では年齢で補正するとBMI高値とWC高値がAPのリスク因子であった。4) 女性においてのみ、BMI低値と10mm以上のAPおよびadvanced adenomaの発生、また、WHR高値と近位大腸でのAP発生が関連していた。5) 肥満関連バイオマーカーとの検討では、男性において、LeptinにのみAPとの関連性を認めた。以上の結果より、APの発生にはMetSと関連を認めたが性差はなく、肥満指標との間に性差を認めた。また、肥満関連バイオマーカーでは、男性においてLeptinとAPの発生に関連を認めた。</p> <p>本研究は、MetSが大腸癌の前癌性病変として重要なAP発生において性差関係なくリスク因子となることを示したもので、WC、BMIや肥満関連バイオマーカーのLeptinの重要性の結果も含めて、今後の大腸癌予防対策において臨床で極めて有用な報告であり、学位論文に十分値するものと評価された。</p> | |